鈴鹿国際大学での特別講義

聖書の自然観・人間観

――「世界の中の日本」――

１９９６年４月30日
奥田 昌道

一、聖書の表している思想
二、日本の自然観・人間観と西洋の自然観・人間観
三、創世記における自然観・人間観
1、天地の創造――創世記 1・1 ～ 2・4a
2、エデンの園の物語――創世記 2・4b ～ 3・24
四、自然の秩序の回復への希望と祈り
1、神を知り、畏れ敬う――イザヤ書第11章
2、自然万物の呻き――ローマの信徒への手紙 8・18 ～ 25
五、神・自然・人間
1、自然万物は神によって生かされている――マタイによる福音書のキリストの言葉
2、乳呑み子にこそ神の力が臨んでいる――詩篇 8
3、太陽は万物を照らしている――詩篇 19・1 ～ 6
レジュメ「聖書の自然観・人間観」
資料

●一、聖書の表している思想

皆さん、こんにちは。初めの起立、礼という挨拶はとてもすばらしいですね。このごろは、私がもといた大学でも、そういうものは全く無くなっております。けれども、人間としてお会いするときに、お互いに礼をする、それは相手の人格に対する自分の敬意を表すことなので、お互いにそれを表すというのはとてもすばらしいことだと思います。私の授業ではそれはやっていませんけれども、気持ちの上では、教室に臨むときに、そういう気持ちでしたいなぁ、ありたいなぁという思いがしています。先生が偉いということではなくて、お互いが本当に大切な人格である。先生と学生は対立しあっているのではなくて、真理という一つの目標に向かってお互いに学び合う間柄だと思うのです。真理に対する畏敬の思い、それを挨拶のときにも心に秘めながら挨拶をするということです。私は、スポーツが好きですから、野球だったら、プレイボール（英 play ball）の前にホームベース（英 home base）を挟んで、両軍が向かい合って挨拶をする。それはすばらしいことだと思いますので、そういう気持ちを、どうぞ、大事にして下さい。

今日は「世界の中の日本」の副題として「聖書の自然観・人間観」ということで、資料を縦書きの物が三枚、レジュメ（独 Resümee 概要）として横書きの物を一枚、用意いたしま

した。すべて私の手作りの作品です。もちろん、コピーは手作りではありませんけれども、原版は手作りであります。

私と聖書との出会いというのは、皆さんの年齢よりは少し経ってから、大学を卒業して二年目にありました。そのころ、私はとても人生の問題で悩んでいました。学者の卵として研究生活の道に入ったのですけれども、本当に迷いなく研究する、学問するということにはまず、

「自分自身が何者であるのか、研究しようしている自分というものは一体何者なのか」

という問いが、私の中に押えようとしても押え切れなくて、湧き上がってくる。皆さんと同じように教室で学生として勉強しているときは、そういうこともちらちらはしましても、たくさんの仲間が横に居てくれるものですから、あまりそれに囚われないでいることができました。特に私は国家試験を受ける身でありましたので、勉強に熱中しようとして、今言ったような問題は振り払ってきた。けれども、いざ、卒業して学校に残って自分が独りぼっちになって、研究室でドイツ語のむつかしい書物とにらめっこ、それを朝から晩まで日曜日も無く毎日、大学の研究室に来てやっておりますと、

「一体、自分は何者なのか」

という問いから逃れられなくなり、とうとう勉強もできなくなってしまいました。そういう時に、クリスチャンの友人と話し合う機会があり――卒業後二年目の夏休み前でした――キリストのこととか聖書のこととかいろいろ話を聞いて、

「ひょっとしたら、ここに自分の求めているものがあるかも知れない」

と思って、友人が行っているキリスト教の集まりに行ったというのが、私と聖書の出会いでありました。私の求めて行ってぶつかったのが、聖書、キリストであったから良かったと思っています。仏教の本も少しかじりました。鈴木大拙さんも読みました。けれども、なかなか自分で本当にそれに全身を托する、身体を托する、人生を托するところまではいきませんでした。

しかし、キリストという一人の霊的な人格との出会いがあったのです。これがもし、変な人格だったら、大変なことになっていたと思います。今、新聞その他の報道でいろいろ話題になっておりますでしょ。みんな純粋な青年たちだった。それが、様々な問題を抱えて飛び込んで行った。ところが大変な地獄の中に引きずり込まれて、非常に今、後悔している人、反省している人、いろいろな方がいらっしゃいます。そういう意味では、私は幸運でしたが、どうぞ、皆様も本当に正しいもの、本当に心を打つもの、そういうものを見いだしていただきたい。これは、理屈でこちらがあちらよりどういう理由で正しい、あちらはどういう理由で間違っている、ということを簡単には言えないような側面があります。それだけに、いろいろ皆様も警戒心もあるでしょうし、迷いもあるかと思います。今日、話

しますようなことを一つの参考にして、これからの大学生活の中で、自分は何に出会おうか、何を自分の人生の導きの糸として、あるいは導きの星として求め続けていこうか、というきっかけになれば幸せだと思います。

この大学は国際大学と銘打っております。現実に海外の様々な国から留学生の方が見えていますし、先生方にも外国籍の方がたくさんおられます。正に、今、地球は段々、時間的距離的にお互いの間が短くなってきています。そういう意味では、我々は東洋の一角の日本というところで生活しておりますけれども、目は、心は常に全世界に向かっている。また、全世界のものを吸収する。しかも、地球だけでなくて、宇宙までのことを自分の手の中に収めようとしているような時代です。情報発信といったこともインターネットとかを通していろいろなものがすぐ手に入るような時代です。と同時に、我々が広がりということを考えますときに、横だけではなくて、縦の広がり、つまり、古代ギリシャではどうだったのか、ヘブライでは、ローマでは、あるいはインドでは、日本ではといった、縦のライン（英 line 線）というものにも心を配る必要があります。我々はとかく古代の人たちは素朴で今の私たちよりも、知的にも低いのではないかという思いに囚われるかも知れません。確かに自然科学という面では、現代はとてつもない進歩をしてしまいまして、古代の人たちは本当に驚くだろうと思います。我々だって驚くのですから。

けれども、

「人間とは何ぞや、人間の本質は？」

という問題に関しましては、私は聖書にぶつかる限り、むしろ昔の人の方が凄かったという印象を否めない部分があります。

もちろん、今日ここで取り上げる創世記は神話的なものでありますし、そこでみる世界観というものは、小さい世界ですし、また、例えば、天体と地球の関係でも、地球は静止していて、太陽が地球の周りを回っていくという、自然観であります。けれども、そういう自然観でありながら、その中に表されている思想というものは非常に深いものがあります。どうして、こんなすばらしい思想が生まれて来たのだろうか、驚くようなものがあります。

また、キリスト教とか、聖書というものは、西洋の文化・文明の根底に流れていると言われます。本当に西洋の文学であるとか、音楽、絵画、彫刻等を理解しようと思ったら、その人たちの根底に流れている思想、育まれて来た精神的風土、そういうものを理解しなければ本当には解らない。

西洋の文化・文明を育んできたものは、ヨーロッパであればキリスト教であり、その聖典である聖書ということにならざるを得ない。

今度は逆に、ヨーロッパで間違ったことがあると、

「あれはキリスト教の所為だ、聖書の所為だ」

と、罪もそちらに着せられる。功罪共にそちらの方に着せられ、

「あんなのよりは東洋の方が優れている。今や東洋の方が優位である、西洋文明は行き詰まった。だから、東洋的な思惟（独 Denken）、思想に回帰しなければならない」

とも言われている。たとえば、日本はファジィ（英 fuzzy 輪郭がぼやけた、はっきりしない）といいます。あんまり物事をきっちり分けない。黒白、あれかこれかという二分法は取らない。「まぁ、まぁ」と言って灰色的に、へたをするとすべてを包み込んでしまう。これは良い面もありますけれども、あるところでは非常にごまかしてしまう、いいかげんに処理してしまうという、マイナスもあります。そのようにいろいろなことが言われるわけです。

どっちにしても、皆さんがこれからいろいろなことを勉強なさるときに、特に西洋のものを勉強なさるときには、こういった聖書とか、キリスト教とのぶつかり合い――ある人は対決というかも知れないし、ある人は学びというかも知れませんが――それを抜きにしてはあり得ないと思います。そういうことで、私は若いときに聖書に触れ、またそれから後、一人の人間としてずっと追い求め続けて来たものですから、そこから得たものを今回、皆さんの前に、一部に過ぎませんけれども、お話してみたいと思う次第です。

●二、日本の自然観・人間観と西洋の自然観・人間観

私が、なぜ、こういう題材を選んだかということは、以上申しましたこととレジュメ（巻末資料）の「Ｉ 日本の自然観・人間観と西洋の自然観・人間観」にまとめておきました。ちょっとご覧いただきたいと思います。

日本では、人間は自然の一部であり、自然と人間は溶け合っている。つまり、自然と人間というものを対立的にとらえないで、人間は自然の一部である。神も自然の一部としてとらえている。

八百万の神々とかいう。

「深い森へ行けば森の中に神様がいる。山へ行けば山の中に神がいる。海には海の神がいる。自然の中に神がいる」

という受け止め方を日本人はしてきました。それから、人間も死にますと神様として祀られたりします。天神様というのは菅原道真、学問の神様です。そのように、人間の優れた人は死にますと神様として祀られました。また、それぞれの村には神社がある。日本は非常に人間と自然あるいは神が分離できない一つのものとしてとらえられているように思います。

それに対して、西洋では世界・宇宙・万物の創造主として神をとらえています。神は超越的存在である。宇宙を含めた自然と人間は神の被造物、神によって造られたもの。そして、その中で人間は万物の霊長として位置づけられています。そしてまた、人間は自然と対立関係にある。人間は自然と戦い、自然を征服しようとする。人間にとりまして自然

は征服すべき対象として現れています。ざっといえば、こんなことが普通よく言われるわけです。

西洋の近代的合理主義の根底にはこのような自然観・人間観があり、これが一方では自然科学の発達を促しました。

なぜかといいますと、神によって造られた宇宙・世界には秩序がある。そこには法則が働いている。だから、その法則を探求していくのが自然科学だということになります。どこまでいっても、究め尽くすことができない。しかし、そこにある法則を自然科学は解明していくわけです。天然の法則、あるいは人体の法則、その他物理法則、すべてそうです。日本の場合でしたら、「ああ、自然は美しいなぁ」と詠嘆は出てきても、科学的に分析して実験をして、そこから何かをつかみ出そうとすることは、あるいは育ちにくいのかも知れません。

近代的合理主義の根底にはこのような自然観・人間観があり、これが一方では自然科学の発達を促したが、他方で人間の精神的行き詰まりをもたらしたと言われ、近時では、

「東洋的・日本的な自然観・人間観に立ち返れ」

と言われるようになりました。

現にヨーロッパからキリスト教の多くの修道僧の方々が、

「もうヨーロッパのキリスト教はだめだ。人間を救うものではない。精神的に行き詰まった。東洋に来て禅を学びたい」

と言って、日本に来て座禅を組んだり、禅を勉強するということさえ見られるわけです。

以上のような自然観・人間観の源がもし、それがキリスト教自体にあるといたしますならば、キリスト教は間違っていた、行き詰まったということになるわけです。しかしながら、果たしてそうなのだろうか。

「キリスト教＝（イコール）聖書」

と置きますと、

「西洋の自然観・人間観＝キリスト教の自然観・人間観＝聖書の自然観・人間観」

ということになりそうであります。

しかし、私はそれぞれが少しずつずれがあると思っております。西洋の自然観・人間観というものが、私が言いましたようなものであるのかどうか、それ自体も問題ですし、また、キリスト教と一口に言いましても、これは随分長い歴史の中で育まれてきました。「聖書＝キリスト教」とはとても言えない側面があります。というのは、聖書というのは中近東、イスラエル（英 Israel）で育まれてきた思想、歴史を背景にして成立したものですが、キリスト教はこの聖書を正典として受容しつつ、ローマ以降ヨーロッパに広まっていったわけです。そして広まっていく過程でやはり、一つの変容を遂げているだろうと思われます。ですから、キリスト教の自然観・人間観、それ自体がどんなものかということも学問

的には問題ですけれども、それらのことはさておき、私にできることは源泉である聖書自体に直接ぶつかって、聖書の示す自然観・人間観、これをたどってみたいと思うわけです。これなら皆さんもできることですね。キリスト教を本格的に勉強しなくても、聖書はずっと前から翻訳されていますし、最近も数年前に「新共同訳」というものが出版されました。もう明治以来、聖書は翻訳されています。そういうことで、聖書自体の自然観・人間観、これをたどってみたいと思います。

聖書は旧約聖書と新約聖書の二つからなっています。旧約聖書の方がずっと分厚い。歴史も長いです。新約聖書はキリスト以降でありますから、ごく短い時間のことしか書かれていませんし、その新約聖書はキリストの言葉とその行動、それを弟子たちがいろいろな言い伝えを基にして、四つの福音書にまとめあげたマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる福音書と、キリストが世を去られた後に弟子たちが伝道した記録としての使徒行伝（使徒言行録）、それから、初代の教会に当てたペテロの手紙、パウロの手紙とかいった書簡類、最後にヨハネの黙示録、そういうもので成り立っています。この新約聖書がキリスト教の一つのベース（英 base 基部）になっていますが、新約聖書を生み出したものは、旧約聖書です。キリスト自身も旧約聖書を聖書と呼んで、その中から、自分の生命をくみ取って来られました。また、キリスト自身は、旧約聖書はすべて自分のことを預言しているという立場で受けとっておられました。そういうことで、旧約聖書と新約聖書を合体して聖書と呼んでいます。

●三、創世記における自然観・人間観

その旧約聖書の冒頭に置かれているのが創世記です。皆さん、「あぁ、おとぎ話か」と思われると思いますが、これは天地創造の物語から始まって、アブラハム、イサク、ヤコブというイスラエルの民族の歴史、最後はヨセフに至るまでのことが書かれています。資料の創世記第1章「天地の創造」というところを見て下さい。この私の解説は私の独自の考えではなくて、聖書辞典から要約引用しております。聖書は普通の文書と同じように、いろいろな資料から合成されてできあがっています。それでいながら、一つのまとまりをもっている文書なのです。創世記自体もここに引用しましたのは、二つの違う資料から成り立っています。創世記第1章1節～第2章4a節の資料では、神のことを「神」と訳しています。

「神は天地を創造された」

創世記第2章4b節～第3章の方では

「主なる神が」

と、そういう言い方をしています。同じ神を表すのに、言葉が違うわけです。2・4bの部分は神のことを「ヤーウェ（独 Jahve）」という言葉で呼びますのでJ文書と言われます。2・4aの文書は祭司（独 Priester プリースター）が編集したというので、P文書というふうにいい

ます。P文書の方は、バビロン（英 Babylon バビロニヤ帝国の首都）捕囚、これは紀元前の587年から538年というほぼ50年間、イスラエルの人たちがバビロンに連れて行かれて、そこで捕囚の憂き目にあったという民族の苦難の体験ですが、その苦難の時代の後で、祭司によって編集されたもので、非常に古い伝承を含んでいるということです。この文書の1章1節から2章の4a節というところまで、神は七日で天地を創造されたという記述になっています。それで、解説の中の①、②、③…というのは、創世記の中の記述で、「第一日である。第二日である」というふうに一日ごとに天地の創造が順序よくなされていくという記述になっていますので、それを要約して①～⑥までまとめ上げてみました。

ちょっとお断りをしておきますが、レジュメに「II 創世記における自然観・人間観」としまして、解説をいたしました。創世記の記述は、自然科学的に天地創造の由来を述べるものではない。自然科学的に言えば、40億年前に宇宙が造られたとか、大変な数字なのですね。生物が現れたのは30何億年前であるとか。そういうことが考古学、自然科学の究明によって段々と明らかにされています。進化論もダーウィン（英 Darwin 英国の博物学者）によって唱えられました。それらとこれとは関係がないと思って下さい。創世記の記述は、自然科学的に天地創造の由来を述べるものではない。神話的記述を通して、事物の本質に迫ろうとするものとして受けとめるべきものである。こういうふうに考えられます。

●1、天地の創造――創世記1・1～2・4a

まず、実物に当たることにいたしましょう。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

『光あれ。』

こうして、光があった」（創世記1・1～3）

初めは地は混沌としていて、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。そこで神が「光あれ」と言葉を発せられると光があった。つまり、言葉によってまず、光が創造されたということです。

「神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

神は言われた。

『水の中に大空あれ。水と水を分けよ』

神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

神は言われた。

『天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ』

そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

『地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ』

そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

神は言われた。

『天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ』

そのようになった。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。

つまり、太陽と月ですね。

神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日である」（創世記1・4～19）

ここまでは、植物と天体と大地、海、大空、そういうものです。

神は言われた。

『生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ』

神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。

『産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ』

夕べがあり、朝があった。第五の日である。

神は言われた。

『地は、それぞれ生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ』

そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。
『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ』
神は言われた。
『見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう』
そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。
第二章
天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。
これが天地創造の由来である。」（創世記1・20～2・4）

なんとも、美しい物語だと思われませんか。最後に生き物が出てきました。五日目には水中の魚だとか、水中の怪獣だとか、それから、鳥も産まれてきました。第六日目になりますと、地の動物たちが産まれてきました。そして、最後に人間が造られた。しかも、人間は神にかたどり、

「我々にかたどり」

と、神は自分のことを複数形で呼んでいることは、どういうことか分かりませんけれども、非常に擬人化して、「我々にかたどり」と書かれています。我々に似せて、人を造る。しかし、本来、神というものは形がないわけです。だから、「我々に似せて、かたどり」というのはどういうことであるか。それから、人の役割というものがここに出て来ます。そういう海の魚とか、空の鳥、家畜、動物たちを、

「それらを全部従わせよ、それらを治めなさい」

と言われています。そして食物は、動物には青草、人間には果樹――毎年実り、生命まで奪わない――野菜といったものでありまして、動物を殺して食べるとかいうことは、ここには全然出ていない。また、強い動物が弱い動物を食べるということも出ていない。実に平和な世界がここに展開されています。

「神はこれらを御覧になって、とても満足だ、極めて良かった。そして、第七日目にはゆっくりと安息された」

ということが書かれているわけです。私のレジュメをちょっと見ていただきたいと思います。これをこんなふうにまとめました。

《1　創世記1・1～2・4a

天地創造を時間的順序にしたがって記述しつつ、人間が創造の最終時点において、いわば創造の完成として位置づけられていることに注意すべきである。また、人間は「神にかたどって」「神に似たものとして」創造された。神は無形・無相であるから、「神にかたどって」「神に似たものとして」とは、人間の本質がそのようなものであるということ、愛、聖、誠実、義といった人格的・内面的な本質を指し示していると言えよう。また、そのような存在だからこそ、自然・万物（動物たち）を統治すべき任務を授かったと言える。》

神は無形・無相でありますから、「神にかたどって」とか、「神に似たものとして」とは、人間の本質がそのようなものであること、即ち神の本質は何ぞやと考えますと、愛、聖（清さ）、誠実、義（正しさ）といった内面的な徳目・性質ということになりましょうから、「神にかたどって」「神に似た者として」というのは人間の人格的・内面的な本質が神に即していること。人間が本来、神の被造物であるならば、そのような性質を持った存在であるというふうに位置づけられていることが分かります。また、そのような愛の存在だからこそ、自然・万物（動物たち）を統治すべき任務を授かったと言えるのではないだろうか。

ここに

「支配せよ」（創世記１・26）

とあるのは、どのような意味かドイツ語の聖書で調べてみました。昔の口語の聖書では「統めよ」と書いてあります。メンゲ（独 Menge 人名）のドイツ語訳では「ヘルシェン」（独 herrschen）、やはり「支配する」という言葉が使われてありました。それから、

「従わせよ」（創世記１・28）

というところは「ウンターターン」（独 untertan）、「服従させよ」という言葉が使われていました。それはどういうことなのだろうか。これは私の解釈になるかも知れませんが、「統治する」とは決して、抑圧するとか、征服するとかという対立関係ではなくて、むしろ、同じ仲間のリーダー（英 leader 主将・キャプテン、兄さん役）格の役目を果すということではないだろうか。そのように思うわけです。喧嘩をするのではない。自然界に秩序がなければいけない。だから、人間は神様に代わって、「自然を統治する、秩序あらしめる」という役割を賜ったのだろうと考えたわけです。

食物も、人間には野菜とか果樹の実であり、動物には青草が食物でありまして、人間と動物の戦いとか、動物の間での弱肉強食という強い動物が弱い動物を食べるといったことは見られません。

そういう見方がここに示されています。もっとも、このような創世記がどうしてイスラエル民族の中に受け入れられたのかということは私には分かりません。と言いますのは、イスラエル民族というのはアブラハムの歴史をひもとくと分かりますように、アブラハムよりももっと前に、創世記の中にカインとアベルという兄弟の物語が出てくるのですが、カ

インは農耕に従事する、アベルは羊飼であったという記述が出てきます。それから、アブラハム以来の歴史の時代をみましても、イスラエル民族は遊牧の民です。その宗教は動物を屠ってその血を捧げるという、我々日本人からいうととても血生臭い宗教なのです。我々は稲穂を捧げるとか、自然の恩恵を捧げることになじんでいますけれども、イスラエルでは動物、しかも、一番初めて産まれた動物の男の子、一歳のオスを捧げ物として捧げるという宗教儀式が行われる民族なのです。そういう民族に菜食主義みたいなこんな神話がどうして受け入れられたのか、と考えると限りがないのですが、とにかく、これが創世記の始めに置かれているということに私はある種の感動を覚えるわけです。

●2、エデンの園の物語――創世記2・4b～3・24

それから、次に、2・4bという別の資料（J文書）にいきますと、これは紀元前950年頃に、一人の著者あるいはグループによって書かれたと言われています。しかも、ここでは自然的順序、時間的順序で創造のことは言っていない。人間が一番中心に置かれています。そして、人間のために動物たちが造られていくという書き方がしてあります。ちょっと読んでみます。

「主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。

しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創世記2・4～7）

「人間は土くれから造られたなんて、なんとつまらない」と、皆さん、憤慨されるかも知れませんが、土くれから、その塵から人を造った。アダマ（土）から造られたからアダム（人）と言われています。しかも、人間が生きるようになったのは、神が生命の息を鼻から吹き込まれた、インスパイア（英inspire吹き込む）する。それで人は生きる者となった。これもなかなか意味深いと思うのです。

「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいでさせられた」（創世記2・8～9）

二本の大事な木がちょうど真ん中にある。命の木というのと善悪を知る知識の木がある。神は、

「この二つの木には触れるな。他の木からなる実は何でも食べても良い。しかし、

この命の木というのは直接には言われていませんけれども、

善悪の知識の木からは取って食べてはいけない」

という命令を与える。エデンから川が流れている。四つの川があります。チグリス川、ユーフラテス川という我々が歴史で習うような川の名前も出てきます。15節から、

「**主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。**

『**園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう**』（**創世記2・15～17**）

これはどういうことでしょうね。皆さん、大学に来た、何のために来たか、知識を得るためである。しかも単なる自然科学的な知識だけではない。判断力、善悪を知る判断力を養いたいと思って、大学へも来られたはずです。哲学を学び、倫理（りんり）学を学び、いろいろな勉強をして、自分で善悪を判断して、そして、人間社会を本当の正しい人間社会を造り上げていく、そういう志（こころざし）をもって勉強を始めておられるはずです。ところが、この創世記は、

「**命の木と善悪を知るの木、これだけは触ってはならない。善悪を知る木からは取って食べてはならない。そこから食べると必ず死ぬ**」

と恐ろしいことが言われています。これはどういうことなのでしょうか。これを一つの謎（なぞ）にしておいて下さい。あとでまた申し上げます。

それからもう一つ大事なことは、ここではまだアダム一人しかいません。男なのですね。ところが、

「**一人では良くない、寂しそうだ。彼にふさわしい助け手、語らう相手、相談する相手、一緒に何かをやり遂げていく本当の伴侶（はんりょ）、これを与えなければならない**」

ということが出て来ます。

「**人が一人でいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう**」

そこでまず、神はいろいろな動物を造られます。こちらの方の創世記ではこの段階で初めてありとあらゆる動物が造られ、アダムのところに連れて来られます。

「**名前をつけてごらん**」

と言われて、アダムはいろいろな名前をつけた。その通りの名前になった。けれども、全然気にいらない。自分の伴侶としては物足りない。寂しそうにしている。

「**主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた**」（**創世記2・21～22**）

この話も皆さん、良くご存じでしょう。あばら骨から取ったのなら男のあばら骨は一本足りないはずではないか、そんなことも聞かれたのではないでしょうか。もちろん、これ

は神話ですね。深い眠りに落とされたということは、

「アダムは神に信頼して、神の懐（ふところ）にすやすやと眠っている、自分を任せ切っているという姿」

が表されています。そのときに、神は別の土くれから女性を造られたのではなく、アダムの中のあばら骨の一つから造ったということは、

「本来、一体だったものがそこで二つに分かれた」

ということを表しています。つまり、同質である。全く、別物であれば、結び合わせる共通項はないわけです。けれども、本来一人の人格であったものが、二つに分かれた。そういうことがここで暗示されていると思う。そして、眠りから覚めたアダムの前に、ものすごく美しい女性がそこに立っているわけですね。アダムは驚きの声を発した。動物がもって来られたときとは全然違う。動物もすばらしいと思うのですが、全然違う。「これはすばらしい！」と、驚きの声を発しました。

「『ついに、これこそ
わたしの骨の骨
わたしの肉の肉。
これをこそ、女（イッシャー）と呼ぼう
まさに、男（イーシュ）から取られたものだから』
こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。
人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった」（創世記２・23～25）

ここまでは、まだ美しい物語なのですね。

ところが、次の第３章が問題の場面です。蛇（へび）が出てくる。蛇が誘惑（ゆうわく）する。女性の方が先に蛇の誘惑に引っ掛かって、神の戒（いまし）めを破ってしまった。次いで、アダム、男の方もその誘惑に負けてしまう。そこから、非常に悲しい事態が出現いたします。

「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢（かしこ）いのは蛇（へび）であった。蛇は女に言った」（創世記３・１）

これも気になりますね。神が造られてみんな良かったのでしょ。Ｐ文書の創世記では、

「すべて良かった」

と言って満足されたのです。こちら（Ｊ文書）は「すべて良かった」とは書いていませんが。造られたものの中で最も蛇が賢（かしこ）かった。最も賢い蛇が女性を誘惑した。ひいてはその女を通して、男、アダムを誘惑した。最も賢いという賢さが人を誤らせたということです。

これは最近の「オウム」の出来事を見ましても、非常に賢い人たちが、何でと思うようなところに身を委（ゆだ）ねていったということ、人ごとではありません。単なる賢さ、知恵、知識、それだけでは危（あぶ）ないということが、近時（きんじ）のああいう事件でも分かります。それから、さか

のぼれば、原子爆弾とか、いろいろな科学的な知識が悪用されて、今、人類はその犠牲になろうとしているわけです。旧ソビエトのチェルノブイリをご覧下さい。罪のない何百万の人がチェルノブイリの原子炉の火災によって、子々孫々まで被害を受けようとしています。しかも、あれは一国に止まらない。放射能というのは風に乗ってどこへでも飛んで行きます。地は呪われて、もはやあそこは死の地帯です。人の住めない、そういう事態が現に20世紀の終わりに起こっている。これから見ます第3章の神話、物語は人ごとではない、正に現代の我々の姿そのものを暗示しているのではないかと思われるくらいに、話ができすぎているとさえ思えます。第3章をもう少したどってみたいと思います。

「蛇は女に言った。

『園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか』

女は蛇に答えた。

『わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。園の中でも、中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました』

蛇は女に言った。

『決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ』」（創世記3・1～5）

なかなか蛇もやりますね。

「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた」（創世記3・6）

「知恵が欲しい、賢くなりたい。できるならば神のように賢くなりたい」

と。さらに進みますと、

「神なんかいらない。神様と絶縁して自分で自分の世界を築いていこう。一つ一つ神にお伺いを立てて、神の言われるままに歩いて行く、そんな非独立的な依存的な、そんな存在にはうんざりだ」

と。皆さん、自我の目覚めというのはそんなものですね。皆さんも大体そうでしょ。段々、中学生頃から親の言うことは聞かなくなる。親が疎ましくなる。そうですね。親は、いつまでも子供のことを自分の子供だと思っていますから、子供の反抗の姿を見て悲しくなる。自我の目覚めは大事なのです。親は子離れをしなければならない。自立ということは大事です。けれども、また同時に非常にいろいろな危機的なものがそこに迫っていることも事実です。すべてが親の庇護の下にあったのでは、独り立ちしない。独り立ちしたときには、確かに善悪の判断が要ります。自分の強い意志が要ります。力が要ります。自我の目覚め、神からの独立、そういう問題をここで提示していると思う。それで、実を食べてしまいました。

「女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」（創世記３・６～７）

よくこういう絵画がヨーロッパの美術館にありますね。

「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた

『どこにいるのか』

彼は答えた。

『あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから』」（創世記３・８～10）

今までは、神様は友達、いや、もう姿を見たら飛びついていったのです。ちょうど、子供がお父さんお母さんの姿を見たらかけ寄っていくように、飛びついていったのですよ。ところが、このときはどうですか。まず、自分が裸であるということに気づいた。自分の姿に目覚めた。それから、神の足音が聞こえて来ると、思わず身を隠した。疚しいのです。顔を合わせられない、目を見ることができない。そういう疚しさというものが、やっぱり自分を支配している。そして神は、

「お前はどこにいるのか。お前は何の上に立っているのか、何を基盤として立っているのか。今まで、私の懐の中に抱かれていたではないか。私でお前は満ち足りていたではないか。ところが今、お前は私から離れた。そうすると、お前を支えてくれているものは何なのだ。私から離れてお前は単なる土くれなのだ。命の息を吹き込んだのに、その息が無くなるとお前は死だよ」

と。そういった深い意味が込められているのかも知れません。

「お前はどこにいるのか」

もちろん、アダムはそんな深いことは分かりませんから、

「私は隠れています。裸なのですから」

と。

「神は言われた。

『お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなと命じた木から食べたのか』

「はい、食べました」とは、アダムは答えていない。

アダムは答えた。

『あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました』」（創世記第３・11～12）

奥さんのせいにしているのですよ。アダムは自分が言いつけに背(そむ)いて食べましたと、罪を認めない。

「あなたが私に与えて下さったあの女が、私に食べろと言ったから食べたのです」

と妻のせいにしている。ちょっと男性らしからぬ態度ですね。自分で責任を取っていない。今度は女の方はどうでしょうか。

「主なる神は女に向かって言われた。

『何ということをしたのか』

女は答えた

『蛇がだましたので、食べてしまいました』（創世記3・13）

「蛇が悪いのです、蛇が。あなたのお造りになったあの蛇ですよ、問題は。私ではありません」

と。こうやって、また、蛇に罪をなすりつけていますね。これで主体性のある人間と言えるのでしょうか。でも、我々はよくやりますね。原因を他所(よそ)へ他所へと持っていって、責任逃(のが)れをします。今だって、政治の世界でも、役人の世界でも、経済の世界でも、いろいろなところで責任逃れが行われていますね。まぁ、それは言わないでおきましょう。とにかく、蛇です。そこで次に、神の罰、宣告があります。まず、蛇に対して、

「主(しゅ)なる神は、蛇に向かって言われた。

『このようなことをしたお前は

あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で

呪(のろ)われるものとなった。

お前は、生涯這(は)いまわり、塵(ちり)を食(く)らう。

お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に

わたしは敵意を置く。

彼はお前の頭(かしら)を砕き

お前は彼のかかとを砕く』（創世記3・14～15）

私は若い頃、ドイツに留学していました。南ドイツの田舎(いなか)の保養地、そこの小さなゲーテ・インスティテュート（独 Goethe-Institut）という外国人のためのドイツ語学校に行っていた。そこの先生は文学の専門の先生で、非常に性格のおとなしい柔和な人でした。ある日、小さな動物園にみんなで行った。そのときに蛇がいた。私は思わず、そのハイト（Dr.Heidt）さんという先生に、

「この蛇は呪われた存在なのですね」

と言ったら、憤然(ふんぜん)として、

「なぜ、蛇が悪いのだ。なぜ、蛇にだけ罪をなすりつけるのだ」

と言って、私をたしなめようとされた。それが非常に印象的でした。私はそのころ、非常

にピュア（英 pure 純粋な、生粋の）なクリスチャンですから、創世記の言葉の通りに蛇はけしからんと思っていたのです。ところが、その方は何も蛇の罪ではないという反応を示されたので、そのとき思ったのですね。やはり、あまりにも聖書に凝り固まったオーソドックス（英 orthodox 正説の、正統派の）なクリスチャンというのは、一般の人の感覚からちょっとずれるのだなぁ。逆にヨーロッパでは本当に深く考えたりする人は、聖書あるいはキリスト教から離れるのだなぁと、ふとそんなことを思いました。本当は、それを乗り越えて、聖書の本当の深いところをつかまなきゃならないのに、小さいときから聖書をたたきこまれて信じ込まされると、そういう現象が起こるのだなぁと思いました。ゲーテ（独 Goethe ドイツの詩人）も非常に深く、聖書を読む人ですけれども、教会からは距離を置いています。

アフリカの聖者と言われたシュバイツァー（独 Schweitzer）も非常に自然・動物たちに対する愛を深く持っています。シュバイツァーは牧師の子供として生まれて、本当に信仰深いお母さんに育てられて、子供のころ、お休み前に祈りをする。その時に、大人たちが人間のことばかり祈って、小さい動物たちのことをちっとも祈ってくれないことに不満を抱いて、自分の寝室に行って一人で、

「小さい動物たちがどうか、今晩安らかに眠れますように彼らを守ってください」

と、そういうお祈りをして、初めて自分も眠りについたという人です。シュバイツァーはあるとき、インスピレーション（英 inspiration 霊感）を受けて、「エールフルヒト・フォア・デム・レーベン」（独 Ehrfurcht vor dem Leben 生への畏敬）、「生命あるものへの畏敬」という思想が彼の中に渾然と湧きあがってくる。

蛇はそういう存在なのですけれども、どうも創世記のこういう記事をそのまま受けとってしまうと、蛇というものに対して、裁きの目で見てしまう。これはやはり気をつけなければならないと思うのですが。そういう役割を与えられている蛇というものは、いわば悪の霊、悪魔のお使いとされてしまっている。蛇自身は悪くないのですが、お使いにされてしまっている。しかも、賢い蛇が悪魔のお使い役を仰せつかってしまった。そして、人間を惑わしたことになります。それで、蛇はここで呪われました。それから、お前と女の間、お前の子孫と女の子孫の間、つまり、人類の子孫と蛇の子孫、サタンとか悪魔とか呼ばれるその間の敵対関係がずっと続くということが暗示されています。しかも、女の子孫はお前の頭を砕く、蛇の子孫は女の子孫の腫を砕く。足を砕いても腫を砕いても存在そのものは砕かれません。しかし、頭を砕くということはその存在そのものが滅ぼされるということですね。キリスト教の方では、ここはイエス・キリストの十字架を暗示しているのだと捉えています。蛇は呪いの象徴、キリストは呪いとなって十字架にかけられた。

「キリストを殺せ、殺せ」

と言った人たちによってキリストは生命を奪われた。しかし、

「生命を投げ出すことによって、キリストは呪いとか、罪そのものを身代わりに背

負った」

と考えられているのです。こじつけかも知れません。しかし、ここにこんなことが出ているということは、不思議な思いがいたします。

さて、その次にいきます。

「神は女に向かって言われた。

『お前のはらみの苦しみ〔産みの苦しみ〕を大きなものにする。

お前は、苦しんで子を産む。

お前は男を求め

彼はお前を支配する』」（創世記3・16）

どうも男性優位であまりよろしくありませんけれども、こういうことが言われています。

「神はアダムに向かって言われた。

『お前は女の声に従い、取って食べるなと命じた木から食べた。

お前のゆえに、土は呪われるものとなった』」（創世記3・17）

これは大事なのですね。神に対する背きのゆえに、今まで豊かであった自然、これが汚された。土はもはや草木を生み出さなくなった。果実を生み出さなくなった。非常に不毛な土壌に変化していくということがここに言われています。

「『お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。

お前に対し

土は茨とあざみを生えいでさせる

野の草を食べようとするお前に。

お前は顔に汗を流してパンを得る

土に返るときまで。

お前がそこから取られた土に。

塵にすぎないお前は塵に返る』」（創世記3・17～19）

労働は人間にとって非常に辛いものになってしまった。それまでは、心地よい運動であったわけです。心地よい汗を流して、食べ物を食べ、平和の中に生活ができた。ところが、今度は労働が苦痛になってきた。お前は顔に汗を流してパンを得る。しかも、土に返るまで。所詮、人は死ぬ。お前は土から取られたのだから、土に返っていく、塵に過ぎないお前は塵に返る。何とも寂しい話ですね。皆さん、そう思われませんか。無常観といいますかね。そういうものが日本では非常に昔からあります。と同時に、自然に返るのだからそれで良いという、諦めもあります。聖書の中にも、「伝道の書」という「コヘレト」の言葉、伝道者の記述というものがありまして、そこには

「空の空、一切は空なり」

という、非常に日本の無常観に共通するような文章も知恵文学の中に置かれています。こ

ういった嘆きがここに書かれています。

私はここで注目したいと思いますのは、本来、人間も自然も動物たちもみんな一つに和合していた。創世記のさきほどの、1章から2章の4a節に描かれていた美しい秩序、それが人間の神への背きによって、地は汚され、自然の秩序が壊され、ここから弱肉強食とかいった、敵対関係が始まった。そんなふうに理解したいわけなのです。と同時に、これが終局の姿ではなく、必ず自然も人間も回復される時が来る。その時をむしろ人類は呻きながら待っているという、そういう思想が聖書自体の中から現れてまいります。一つはメシヤ（英Messiah ユダヤ人の待ち望む救世主）待望の思想となって現れてきます。

それで、さきほどの私の問いかけですね。

「なぜ、善悪を知る木の実を食べることが禁じられたのだろうか。なぜ、知識はいけないのだろうか」

そういう問題です。なぜ、神はそれを意地悪にも禁じたのだろうか。

これは私が思いますのには、神の心は、人間の内的な成熟を待っておられる。なるほど知識も大事だ。しかし、知識自体が一人歩きすると危ない。知識を充分に善のために、世界のために、愛のために使えるような知識、それが必要だ。そのためには、人間自身が真の意味で、神のような質を自らの中に持たねばならない。愛とか聖とか義だとか、誠実、信頼、そういう徳です。そういうものが本当に人間に備わったときに、獲得する自然科学的な知識を人類の幸せのために、宇宙の平和のために使うことができるでしょう。けれども、その人間の徳が育たないうちに、自然科学的な知識だけを身につけて悪用したら、悪魔に足をすくわれて大変なことになる。良き知識を悪用したら、さっき言いましたような「オウム」だとか、核兵器だとか、細菌兵器だとか、いろいろな人間・自然を壊すような形に用いられてしまう。そのことがここに暗示されているのではないだろうか。人間が内的に成熟するには時間を要する。成熟してから後に、そういう自然科学的な知識を多いに善用しなさいという心が秘められているのではなかろうか。

これは私の解釈です。そんなふうに実は思っているのです。だから、言おうとしていることは、例えば、医学、お医者さんにとって大事なのは、本当に人間に対する愛、人間を単なる物体とか、自然科学的な遺伝子の集合体みたいなとらえ方をしないで、本当に人間の本質は何かという深い洞察があって、初めて、医療というものが成り立つのではないか。あまりにも、科学が進み過ぎまして、試験管ベイビーだとか、男女産み分けだとか、いろいろなことをやりますと、一見、人間の幸せにつながるようでいて、本当は人間に対する冒瀆ではないだろうか、そんなことを思わざるを得ないのです。さきほど、いろいろな面において、今、行き詰まりだと申しましたが、正にその一番大事なものを人間は育むことを忘れたところから、来ているのではないだろうか。そんなことも思うわけです。

次にまいります。

●四、自然の秩序の回復への希望と祈り

●1、神を知り、畏れ敬う――イザヤ書第11章

資料では、イザヤ書という書物から、第11章を引用いたしました。このイザヤというのは、紀元前740年に20歳、皆さんと同じか少し年のいった頃ですね、身分は大変な貴族の出身だったそうですけれども、その青年イザヤが神の召しを受けました。そして、以後、40数年にわたって、南王国ユダ（英 Judah パレスチナの古代王国）において預言者（注）として活動いたします。

（注）預言者：神から直接啓示を受領して、それを公に告知する人。旧約の預言者は神から直接召命を受け、その職務を全うしうる霊的な備えを与えられ、その置かれた時代と具体的状況に対する神の恵みとさばき、神の本質・意志・計画を告知した。（聖書辞典「預言」の項目、新教出版社より）

イザヤは旧約聖書の中での最大の預言者の一人と言われている人です。当時のユダの国は、東にはアッシリヤ（英 Assyria 西部アジヤの古代の国）帝国、南にはエジプトという二大勢力がありまして、それに挟まれて右往左往しているという政治的に困難な時代にありました。国内的には社会的不正義、道徳的な堕落、また神に対する信仰が失せるといったどん底にあったわけです。そういう時に、イザヤがこんな預言をしているのです。前半はメシヤ、キリスト預言と言われるものです。後半は自然界の回復の姿です。ちょっと読んでみます。

「エッサイ〔ダビデの父〕の株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち
その上に主の霊がとどまる。
知恵と識別の霊
思慮と勇気の霊
主を知り、畏れ敬う霊。
彼は主を畏れ敬う霊に満たされる」（イザヤ書11・1～3）

いうならば、アダムとエバに欠けていたものです。

「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」

さきほどの、

「自らが神のように賢くなる在り方」

と、

「神を一切として自己を神に委ねて神からすべてを戴く在り方」

この二つは似たようであっても決定的に違う。一方は、自分が神になっている。もう一方は、神の前に自分を空っぽにしている姿、これは実はイエスという方の姿なのです。

「私は自分からは何もできない、私は何者でもない。神が一切だ」

と言って、神の懐の中に自分をすべて投げ出している。そして、神から一切を受けとっている、これがイエスの在り方なのです。イエスは、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

と言われました。「霊の貧しい」ということは自分を何者ともしない。自分を空っぽにしている姿なのです。すると、

「０＝∞」（ゼロ＝無限大）

神の無限無量がイエスという方の中に充満した。天国が成就していた。これがイエスの在り方なのです。

己を低くする者を神は高くする。己を高くする者を神は拒絶する。そういう一つの法則というものが貫いています。皆さん、どうぞ、宗教を見分けるとき、今言いましたように、己を神とする宗教か、己を神の僕として神の前に平れ伏す宗教か、に目をとめて下さい。イエスは自分を神の僕として、徹底的に神の前に投げ出して、あげくの果てに自ら十字架にかかって、神の前に自分を捧げていますね。一番低いところに降りていって、自分を投げ出している姿かどうか、これが見分ける秘訣ですから。このイザヤ書第11章に要約されているのはそういう霊です。

「彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。
目に見えるところによって裁きを行わず
耳にするところによって弁護することはない」（イザヤ書11・３）

外見で裁きをしたりしない。表面的なことで裁いたり、聞いたりしない。

「弱い人のために正当な裁きを行い
この地の貧しい人を公平に弁護する。
その口の鞭をもって地を打ち
唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
正義をその腰の帯とし
真実をその身に帯びる」（イザヤ書11・４～５）

これが将来現れる救い主の預言なのです。それから後半部はまたすばらしい。

「狼は子羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。
子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。
牛も熊も共に草をはみ
その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ

幼子は蝮の巣に手を入れる。
わたしの聖なる山においては
何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように
大地は主を知る知識で満たされる」（**イザヤ書11・6～9**）

こんな世界が来たら、すばらしいですね。狼も羊も仲良く戯れて遊んでいるという世界。お互いにかみ合ったり、食い合ったり、滅ぼすのではなくて、共存共栄している世界。このごろ、共に生きる、共生ということが言われます。共生、それがここに描かれています。獰猛なライオンだとか、虎だとかも小さな子供に導かれて、喜々として楽園の中を散歩している姿、それがここに描かれています。これはビジョン（英 vision 幻想）です。でも、これは単なる想像ではない。神によって示されたビジョン、そう思わざるを得ません。

●2、自然万物の呻き――ローマの信徒への手紙8・18～25

次に、引用していますのは、「ローマの信徒への手紙」、これは紀元後56年頃、パウロ（英 Paul）という人がコリント（英 Corinth 古代ギリシャの都市）滞在中に書いたものと言われています。パウロはユダヤ教徒で、キリスト教徒を迫害する急先鋒でありましたが、キリスト教徒を迫害するために今でいうならば、逮捕状といいますか、そういうものを公に貰って、ダマスコ（英 Damascus シリヤの古都）という所へ、聖書の記述によれば、迫害の意気を弾ませながら向かったとあります。そのとき、真昼間に空から光が現れてパウロは地に倒された。そして声が聞こえた。そのころ、サウロという名前でした。

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するや」

そういう声が聞こえた。

「一体、あなたはどなたですか」
「お前が迫害するイエスである」

と、そういう声なのですね。つまり、キリスト教徒に対する迫害はイエス自身に対する迫害である。パウロはそこでぶっ倒されて目が見えず、物が言えず、三日間、暗黒の中に物も食べないで過ごします。それから、アナニヤという人に手を置いて祈ってもらって目が開かれる。パウロの

「目から鱗の如きもの落ちたり」

という記述があります。よく、「目から鱗が落ちる」という言い方をしますが、これは新約聖書の使徒行伝（使徒言行録）というところに出ています。それで、パウロはガラッと変わるのですね。それ以来、

「キリストは救い主だ」

と言い出すのです。そして、今度はユダヤ教徒から迫害されて最後は殉教するという非常

にドラマティック（英 dramatic 劇的な）な生涯を送った人なのですが、このパウロが書いた手紙、これがロマ書（ローマの信徒への手紙）と言われています。その第８章に、こういうことが書かれています。

「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方〔神〕の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく〝霊〟神の霊です、特別な意味をもっている。の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われること

土に返って行く死の体が、死なない本当の天国の体、霊の体、復活の栄光体に変えられる時の来ること

を、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちはこのような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです」（ローマの信徒への手紙８・18～25）

つまり、パウロは単に自分が救われたいとか、この死の体から贖われて永遠の生命にふさわしい体に甦る、そういうことになりたいとは、言っていない。自然万物も共に救われなければならない。自然万物は呻いている。そういう自然界の呻きを聞き取っている。シュバイツァーさんと一緒です。シュバイツァーさんはパウロと一緒といってもいいかも知れない。皆さん、今の人間に必要なのはこの思いなのですよ。

私はさきほど、東洋は、日本は自然と同化すると言いました。自然の心を心として、自然と溶け合うと言いました。けれども、溶け合って共に滅びるのではだめなのです。自然も滅びない姿に変貌して欲しいという祈り、呻きがあるのです。

例えば、白隠和尚の歌とかうかがっていますが、

「闇の夜に啼かぬ烏の声聞けば生まれぬさきの父ぞ恋しき」

と、あります。昔は今のようにネオンが輝いていません。だから、闇の夜というのは「ぬばたまの…」といわれるくらい、本当に真っ暗です。その闇の夜に烏が止まっていて啼かない。何も見えない、聞こえない。しかし、その烏の声を聞くというのです。それを聞き

分けるならば、自分は生まれぬ前のそのまだ昔の父、お父さんが恋しいという、理屈にならない歌を白隠和尚は詠(よ)んでいるのですね。あるいは、良寛(りょうかん)にしましてもみんな自然の心を、深い呻きを聞き取っている人がすばらしい歌を詠み、芸術的な表現をしているのですね。皆さん、現代人はあまりにも自然をばかにしています。自然を物だと思っています。とんでもないのですね。

シュバイツァーさんはアフリカへ行って、目覚めたのですよ。あの人は子供の時からやさしい人だった。恵まれた家庭に育ったものですから、21歳、大学生のときに、フランスのシュトラースブルクという大学で神学と音楽と哲学を勉強して、すべてが満たされた。ところが、自分だけのために生きて自分だけが幸福であって良いのだろうか、という思いにとらわれ、あるとき、

「そうだ、苦しんでいる人のために自分の幸せ、能力といったものを捧げよう」

という思いに導かれる。そして、30歳までは自分のために生きよう、30歳になったら、自分の人生を人のために捧げよう、と思うのです。そして、30歳近くになったとき、何が自分の道かということを非常に考えて、焦(あせ)ってきました。そんなとき、アフリカの病院の話がフランスの宣教師会から送られて来るパンフレットに載(の)っていた。向こうでは、黒人が病気で苦しんでいる、宣教師はたくさん来るけれども、医者は来ない。医師の資格を持っている宣教師が来て欲しい。そういう記事に彼ははっとしまして、「そうだ、これだ」と思い、30歳になってから改めて、シュトラースブルクの医学部に入り直したのです。そのとき、彼は神学博士でその大学で神学の講師をしていた。一方で神学の講師として教壇に立ちながら、傍(かたわ)ら医学部に入り直して6年間医学の勉強をする。そして、医学生のとき知り合い、37歳で結婚をした奥さんと一緒に、38歳のときに、アフリカへ行く。ランパレネというところに病院を建ててそこで尽くすのですが、そのシュバイツァーさんに訪れた試練は何かと言えば、第一次世界大戦が始まったことです。１９１４年に戦争が始まり、彼はドイツ国籍だから捕虜にされる。そして、苦しい生活をさせられるのですが、そのとき、彼は日頃、黒人の方々にキリスト教の話をしているわけです。ところが、黒人の方々は、

「なぜ、人が人を殺し合うのですか。あなた方は愛しあえとか、敵を愛せよとか、きれいごとを言いながら、現にやっていることは、何ですか」

ということを言われたときに、シュバイツァーは答えようがなかったという経験がある。そして、１９１５年のある夕暮れどき、川をいかだで上(のぼ)っていましたときに、大自然の中で、あるインスピレーションを受けるわけです。

それが「生(せい)への畏敬(いけい)」、生命(いのち)あるものへの畏敬、「エールフルヒト・フォア・デム・レーベン」(独 Ehrfurcht vor dem Leben) という念なのです。

「あらゆる生命あるものを尊ばなければならない。人間だけが万物の霊長(れいちょう)として威張っているときではない。人間はすべての生命あるものと共に生きている。そ

ういうものの恩恵によって、生かされているのだ」

という思いにたどり着くのです。

そして、それ以後、彼は動物を殺さなくなる。そこまで、私は徹底できないと思うのですよ。私は蚊に刺されたら殺しますよ。ところが、彼は一切生命あるものをそれから殺さなくなった。そういう体験がある。本当にこの自然界との調和、共に生きることはた易いことではありませんけれども、それが東洋だ西洋だということでなくて、本当にそうあるべきだし、また、聖書自身の中にもこのように描かれている。パウロはこのような呻きをもっていたということに、皆さん、目覚めて戴きたいと思うのです。

●五、神・自然・人間

1、自然万物は神によって生かされている――マタイによる福音書のキリストの言葉

それから、キリストの言葉を引用しました。皆さん、あとで読んでみて下さい。キリストという方は、これは正に「人」です。イエスという一人の人です。ところが、このイエスという方はまず、神を「父」と呼びました。今まで、神を父と呼んだ人は、おそらく無かったと思います。ところが、彼は神のことを「神よ」とは呼ばない、「父よ」と呼んでいます。自分は「子」として自覚している。同時に彼は自分を神のお使い、神に仕える者、「僕」、神は「主」、主に対して自分は僕として自覚している。僕という使命的な自覚と子供であるという愛の自覚、この二つが矛盾無く両立していた。正に、神の愛する子、そういう存在でありました。そして、キリストがつかまえた神というのは、愛そのものだった。絶対善なのですね。

「**善き者にも、悪しき者にも、太陽を昇らせ、雨を降らせる**」

という無差別の愛なのです。人間は、善き者には善くしてやろう、悪い奴は徹底的にやっつけろと。ところが、キリストは、「それを乗り越えろ」と言われた。それが有名な、

「**敵を愛せよ、敵のために祈れ**」（**マタイによる福音書5・43～48**）

という言葉になって表れてきます。それからまた、自然万物は神によって生かされているということを体で感じておられた。だから、

「**空の鳥を見よ、野の花を見よ、栄華を極めたソロモンでさえ、あの野の花の一つほどにも着飾ってはいなかった**」（**マタイによる福音書6・26～29**）

と言われた。自然の美しさというのは、人工的な美はどんなにそれを尽くしても自然の美しさには敵わない。

「**今日、生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草をも、神はこのようにすばらしく装って下さる。お前たち人間だって、同じように神に大切にされている。いや、もっと大切にされているのだよ。だから、人間はいろいろなことで思い煩う必要は無いのだ、本来の姿に帰れ**」

と。アダムとイブが堕落する前の姿ですね。

「神の懐に安らいでいた姿に帰れ」

と、これをキリストは説いた。

「まず、神の固と神の義を求めなさい。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる。明日のことを思い煩う必要はない」

と、自分自身が神に委ねきった生活をしていた。そういうことで、キリストという方はやはり自然というものと自分を一つに受けとっている。そして、自分を自然の中の人間、その人間の罪のために自分を犠牲として捧げた存在でありました。新約聖書のマタイによる福音書から引用していますが、また後でご覧になって下さい。

●2、乳呑み子にこそ神の力が臨んでいる――詩篇8

最後になりましたが、詩篇にいきます。詩篇第8篇と第19篇はどうも口語訳は物足りない。どうしても文語訳でないとおさまりがつかないので、文語訳の詩篇をここに引用いたしました。

「われらの主エホバよ、なんじの聖名は地にあまねくして尊きかな、
その栄光を天におき給えり。
なんじは嬰児ちのみごの口により力の基をおきて、敵にそなえ給えり、
こは仇人とうらみを報ゆるものとを鎮静めんが為なり」（詩篇８・１～３）

これはさきほどのイザヤ書第11章4節に

「口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる」

とありました。それを連想させます。幼児、乳呑み子、最も弱い者、その口に力の基を置いておられる。神はいわゆる強者の神ではなくて、乳呑み子、幼児という弱者である無力な幼児、乳呑み子にこそ神の力が臨んでいるという詩なのですね。これに目を止めていただきたいと思います。それから次に、

「われ汝の指のわざなる天を観、なんじの設け給える月と星とを観るに、
世人は如何なるものなればこれを聖念にとめ給うや、
人の子は如何なるものなればこれを顧みたもうや」（詩篇８・３～４）

すなわち、

「人間は誠に小さな存在なのに、あなたはこういうちっぽけな人間を大事にして下さっているのですね」

という詠嘆ですね。

「この人間に自然万物を治めるような役目をお与え下さいました」

ということが謳われています。

●3、太陽は万物を照らしている――詩篇19・1～6

それから、第19篇、ダビデの歌となっていますが、

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼はその聖手の所作をしめす。
この日言をかの日につたえ、この夜知識をかの夜におくる。
語らず言わず、その声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく」（詩篇19・1～4）

さっきの白隠和尚の歌と同じですね。

「語らず言わず、その声きこえざるに」

と。しかし、

「肉の耳で聞こえない神の生命の言葉は全地に響き渡っている。その響き渡っている声を聞き取る人は幸いだ」

という歌ですね。

次に太陽を讃えています。太陽は万物を照らしている。その温もり、暖かさによって万物は生かされている。これはやはり、自然と人間との本当に和合している姿じゃないでしょうか。もちろん、太陽といってもアフリカのような炎熱の熱射の下では、人は太陽の強さによって病気にかかったりいたします。ロマンティック（英 romantic 非現実的な）にばかりは言ってられませんが、太陽という存在があって人は生かしめられる。そんなふうに思います。

時間がまいりましたので、これでおきますけれども、私は聖書のこういった端々から人間も自然も共に共存、共栄、共生できるような社会、そういう国、そういうものでありたいという私の願いを込めて今日、皆さんにお話をした次第であります。それでは、これで終わります。ありがとうございました。

●レジュメ「聖書の自然観・人間観」

――世界の中の日本――

１９９６年４月30日　奥田昌道

Ⅰ　日本の自然観・人間観と西洋の自然観・人間観

日本＝人間は自然の一部、自然と人間の融合……神も自然の一部、人間の延長。

西洋＝世界・万物の創造主たる神、超越的存在としての神。自然と人間は神の被造物。人間は万物の霊長。人間は自然と対立。人間は自然と戦い、自然を征服しようとする。自然は人間にとり、征服すべき対象である。

西洋の近代的合理主義の根底にはこのような自然観・人間観があり、これが一方では自然科学の発達を促したが、他方で人間の精神的行き詰まりをもたらしたとされ、近時、東洋的・日本的な自然観・人間観に立ち返るべきことが唱えられることが多い。

以上のような自然観・人間観の源はキリスト教にあると見られがちであるが、はたしてそうであろうか。また、「キリスト教＝聖書」であるとすれば、

「西洋の自然観・人間観＝キリスト教の自然観・人間観＝聖書の自然観・人間観」

ということになるのだろうか

西洋の自然観・人間観やキリスト教の自然観・人間観がいかなるものであるかはさておき、以下には、聖書の自然観・人間観を聖書の記述に即してたどってみたい。

Ⅱ　創世記における自然観・人間観

創世記の記述は、自然科学的に天地創造の由来を述べるものではない。神話的記述を通して事物の本質に迫ろうとするものとして受けとめるべきものである。

１　創世記１・１～２・４a

天地創造を時間的順序にしたがって記述しつつ、人間が創造の最終時点において、いわば創造の完成として位置づけられていることに注意すべきである。また、人間は「神にかたどって」「神に似たものとして」創造された。神は無形・無相であるから、「神にかたどって」「神に似たものとして」とは、人間の本質がそのようなものであるということ、愛、聖、誠実、義といった人格的・内面的な本質を指し示していると言えよう。また、そのような存在だからこそ、自然・万物（動物たち）を統治すべき任務を授かったと言える。「統治する」とは決して、抑圧するとか、征服するとかいうことではなく、いわば同じ仲間のリーダー格（主将・キャプテン）の役目を果たすということではなかろうか。人間の食物は野菜や果樹の実であり、動物の食物はあらゆる青草であった。人間と動物との戦いや動物の間での弱肉強食という戦いはみられない。

２　創世記２・４b～３・24

現実の人間の実相が鋭く描かれている。創造の時間的順序は問題ではない（１・１～２・４aとは逆である）。人間が中心であり、人間と神との関係（神の前に人間はいかなるものか、

その現実のすがた）が記述されている。

ひと（アダム）は土（アダマ）の塵から形づくられた。神の命の息を吹き入れられて人間は生きる者となった。人間の生命の本質は神の命の息（霊）にあるとするならば、これを失うことにより人間は死ぬ、と言わなければならない。

善悪の知識の木……「目が開け、神のように善悪を知るものとなる」ことがなぜいけないのか。これを食べるとなぜ死ぬのか。それは本当か。

その結末……蛇と女、蛇の子孫と女の子孫との間に、神は敵意を置かれた。女の子孫は蛇の子孫の頭を砕き、蛇の子孫は女の子孫のかかとを砕く。女の産みの苦しみ。土は不毛に。男は労働の苦しみ。土からでた人（アダム）は土に返る。

３　自然の秩序の回復への希望と祈り

①イザヤ書11章

②ローマの信徒への手紙８・18～25

４　神・自然・人間

①マタイによる福音書のキリストの言葉

②詩篇８

③詩篇19・1～6

④詩篇148

資料

創世記

創世記1章1節～2章4a節はP文書と呼ばれ、バビロン捕囚（BC587～538）後、祭司により編集されたもの。最古の伝承を含んでいる。

【創造の順序】

①光

②大空（天）

③地（土）と植物（草木）

④天体（太陽、月、星）

⑤水中の生き物（魚）と鳥

⑥地の獣、家畜、土を這うもの

最後に人間（神のかたち）、男女に創造

創世記第1章1節～2章4a節の全文

次にみる2章4b節～3章はJ文書と呼ばれ、紀元前950年頃、一人の著者あるいは、グループによって書かれたものである。

上記のＰ文書の創造の順序とは逆に、人（アダム）が一番先に創られ、（しかも、土（アダマ）の塵で形づくられ、命の息を吹き入れられて生きる者となった）、次いで、木、動物、最後に人（アダム）のあばら骨から女（イヴ）が造られた。

創世記第２章4b節～３章24節の全文

イザヤ書

紀元前740年に20歳代で神の召しを受け、約40年にわたり、南王国ユダにおいて預言者として活動したイザヤは全旧約聖書中の最大の預言者の一人である。当時、ユダ国はアッシリヤ帝国とエジプトという二大勢力にはさまれて困難な時代にあった。社会的不正義、道徳的堕落、不信仰がはびこっていた。

イザヤ書第11章１節～10節の全文

ローマの信徒への手紙

「ローマの信徒への手紙」は56年頃、パウロのコリント滞在中に書かれたもの。パウロはもとユダヤ教徒でキリスト教徒迫害の急先鋒であったが、ダマスコ途上において復活のキリストの顕現に会って回心し、キリストの最大の使徒となった。

次に引用するのは、手紙の中のパウロの祈り、呻き、希望の告白である。

ローマの信徒への手紙第８章18節～25節の全文

マタイによる福音書

新約聖書

「マタイによる福音書」の中のキリストの言葉から、次に引く。

……

キリストは神を「父」と呼び、神への全き信頼の中に生きた。神は全き愛であり、善き者にも悪しき者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる方である。すべての人に対する等しい愛、完全なる愛の方として父神を信受した。

また自然万物が愛の父の御手の中にあることを信じた。

「空の鳥を見よ、野の花を見よ」との言葉となって現れている。

マタイによる福音書第５章43節～48節　敵を愛しなさい

同　第６章５節～15節　祈るときには

同　第６章19節～21節　天に富を積みなさい

同　第６章24節　神と富

同　第６章25節～34節　思い悩むな

同　第７章７節～12節　求めなさい

詩篇

旧約聖書の中に置かれた「詩篇」は、150篇から成る様々な内容の宗教歌集である。バビロン捕囚後のエルサレム神殿における礼拝用に編集され歌われた。各詩は作られた年代の幅も広く、作者も多く、思想も豊かで、神を信ずる者たちの、心から溢れ出た信仰の歌である。祈りの書、また讃美歌集である。

詩篇第８篇文語訳
詩篇第19篇文語訳
詩篇第148篇口語訳

聖書抜粋

1　敵を愛しなさい――マタイによる福音書第５章43節～48節

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しいものにも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。

2　祈るときには――マタイによる福音書第６章５節～15節

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、
御名が崇められますように。

御国が来ますように。
御心が行われますように
　天におけるように地の上にも。
わたしたちに必要な糧を今日与えてください。
わたしたちの負い目を赦してください、
　わたしたちも自分に負い目のある人を
　赦しましたように。
わたしたちを誘惑に遭わせず、
　悪い者から救ってください。』
もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

3

天に富を積みなさい――マタイによる福音書第６章19節～21節
「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」

4

神と富――マタイによる福音書第６章24節
「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

5

思い悩むな――マタイによる福音書第６章25節～34節
「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今

日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

6

求めなさい――マタイによる福音書第7章7節～12節

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」

詩篇第8篇

「われらの主エホバよ、なんじの聖名は地に遍くして尊きかな、その栄光を天におき給えり。なんじは嬰児ちのみごの口により力の基をおきて、敵にそなえ給えり、こは仇人とうらみを報ゆるものとを鎮静めんが為なり。われ汝の指のわざなる天を観、なんじの設け給える月と星とを観るに、世人は如何なるものなればこれを聖念にとめ給うや、人の子は如何なるものなればこれを顧みたもうや。ただ少しく人を神よりも卑くつくりて、栄と尊貴とを冠らせ、又これに聖手のわざを治めしめ、万の物をその足の下におき給えり。すべての羊、牛、また野の獣、そらの鳥うみの魚、もろもろの海路を通うものをまで皆しかなせり。われらの主エホバよ、なんじの聖名は地に遍くして尊きかな。

詩篇第19篇

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、
穹蒼はその聖手の所作をしめす。

この日言(ひことば)をかの日につたえ、この夜(よ)知識をかの夜におくる。
語らず言わず、その声きこえざるに、
そのひびきは全地に遍(あまね)く、その言は地の極(はて)にまで及ぶ、
神はかしこに帷帳(あげばり)を日のために設けたまえり。
日は新郎(にいむこ)がいわいの殿(との)を出づるごとく、
勇士(ますらお)が競い走るを喜ぶに似たり。
その出で立つや天の涯(はし)よりし、
その運(めぐ)り行くや天の極(はて)にいたる、
物としてその和煦(あたたまり)(こうむ)を被らざるはなし。」

〔奥田昌道先生講筵７「聖書の自然観・人間観」、１９９８年５月31日京都キリスト召団発行より転載〕